台大日本語文研究第 33 期
2017 年 6 月，頁 127-148
2017-03-13 收稿，2017-04-25 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2017.33.127

日語外來語詞素「-コン」

林慧君*

摘要

日語縮略詞中，後項詞素是外來語詞根「コン」的複合縮略詞相當多，例如「エアコン」「パソコン」「マザコン」「ミスコン」等。然而，這些具有生產性的後項詞素「–コン」事實上彼此並不具有相同語義，而是一種同音意義的關係。

本論文首先從語義層面確認位於複合縮略詞的後項詞素「–コン」之語意。其次，從構詞法、構詞能力、縮略語詞的縮略法、結合對象等構詞觀點來探討「–コン」做為日語詞素的構詞特徵等。

經考察，確認了「-コン」其同音異義的原詞根包含「コンサート」「コンピューター」「コンパ」等 34 個；另，依據「-コン」的構詞特徵，闡明了含有後項縮略詞根「–コン」其最典型的構詞型態為：(前後項詞素部分省略之短縮法所形成之)[2 音節外来語詞素＋コン]。

最後，透過與宮島(1972=1994)的「無意味形態素」及「ロケ」「レジ」等外来語縮略詞根之對比考察，分析「–コン」的本質，並論述「–コン」在日語中是屬於縮略形拘束詞根詞素的定位。

關鍵詞：外來語詞素、複合縮略詞、拘束詞根、同音異義、構詞

臺灣大學學術期刊資料庫

* 台灣大學日本語文學系教授

The Loanword morpheme ”-CON” in Japanese

Lin,Hui-jun *

Abstract

Many of the rear constituents of abbreviation compound words in Japanese are the loanword morpheme”-CON”, such as “EAKON”,” PASOKON”, “MAZAKON”, “MISUKON” and so on. However, all of the abbreviation compound words with rear constituent”-CON” mentioned above actually don’t mean the same. They are homophones.

The study will clarify the meaning of the compound abbreviation “-CON” which is the rear constituent from the semantic order first. Then, investigating the essence of Japanese morpheme “-CON” from the viewpoint of the word formation rules, word formation ability, the rule of abbreviation and the collocations to discuss the feature of the word formation of”-CON” being the Japanese morpheme.

The study confirmed that there are 34 original bases of the homonym of”-CON”, including” KONSATO”,” KONPYUTA” and” KONPA”. In addition, according to the feature of the word formation of”-CON”, we could sort out that the most classical word formation pattern which includes abbreviation rear constituent”-CON” is (abbreviations by omitting part of the front and rear constituents) [loanword morpheme with two syllables+ CON].

And last, analyze the essence of”-CON” and discuss its position being a part of the abbreviation of bound morpheme through the comparative analysis of “Unsemantic Morpheme” and the loanword abbreviation base” ROKE” and” REJI” by Miyajima (1972=1994).

* Professor of Department of Language and Literature of Japanese, National Taiwan University

臺灣大學學術期刊資料庫

Keywords: loanword morpheme, compound abbreviation, bound morpheme, homophones, word formation

臺灣大學學術期刊資料庫

日本語の外来語形態素「-コン」について

林慧君*

要旨

日本語の略語の中に「コン」を複合語の後項にもつ例がとりわけ多く、例えば、「エアコン」「パソコン」「マザコン」「ミスコン」などが挙げられる。が、この生産性をもつ後項要素「-コン」は実は同じ意味ではなく、同音異義の関係を有すると思われる。

本稿ではこの複合略語の後項に位置する「-コン」について、まず、意味の側面から「-コン」の元語基は何なのかを確認し、次に、造語力や造語法、略語の略し方、結合相手といった語構成の観点から「-コン」の語構成的特徴や形態素としての位置付け、本質などの造語性を究明することにした。

本稿の考察により、「-コン」の意味について、「コンサート」をはじめ、「コンピューター」「コンパ」などの 34 個の元語基を確認できた。次に、「-コン」の語構成的特徴に基づき、(前後略の短縮法による)[2 音節の外来語要素＋コン]という「～コン」複合略語の典型的な造語パターンも解明した。

最後に、「-コン」を宮島(1972=1994)の無意味形態素及び「ロケ」「レジ」といった外来語省略語基と比較しながら、「-コン」の本質を分析し、「-コン」は短縮形拘束語基という形態素としての位置付けを論じた。

キーワード：外来語形態素、複合略語、拘束語基、同音異義、語構成

* 台湾大学日本語文学科教授

臺灣大學學術期刊資料庫

日本語の外来語形態素「−コン」について

林慧君

一、はじめに

日本人の言語生活では、「コンビニ」「ケータイ」「就活」「壁ドン」などのように、伝達の利便性などからことばを略して使用する傾向が見られる。そんな略語の中に「コン」を複合語の後項にもつ例がとりわけ多く、例えば、「エアコン」「パソコン」「マザコン」「ミスコン」などが挙げられる。が、その生産性をもつ後項要素「-コン」は実は同じ意味ではなく、それぞれ「コンディショナー」「コンピューター」「コンプレックス」「コンテスト」というように異なる意味を表しているのである。即ち、これらの外来語の複合略語における後項要素「-コン」は同音異義語[1]の関係を有すると思われる。その同音異義の性質から、「コン」は「アポ」や「バスケ」「ケット」などの多くの外来語の省略語基[2]と違ってやや意味の複雑な構成要素と言える。

本稿ではこの複合略語の後項に位置する「-コン」について、まず意味の側面から「-コン」の元語基は何なのかを確認し、そして造語力や造語法、略語の略し方、結合相手といった語構成の観点から「-コン」の語構成的特徴や形態素としての位置付け、本質などの造語性を究明したい。

---

1 國廣(1982：103-111))には、「多義」と「同音異義」の区別は意味的な関連の有無ということと関わるが、二つの現象は本質的に連続しているものであり、明確な基準は見付けにくい、と述べられている。また、國廣(1982：104-105)には、〈同音異義と多義の区別をするのに言語学者や辞書編纂者が伝統的に援用してきた第二の主要な基準は、意味が関連していないかいるかというものである;〉というように、ライオンズの考えが引用されている。本稿でも、このライオンズの考えに従い、「-コン」は、その諸元語基の間に意味的な関連性を持たないと見られる故、「同音異義語」とするわけである。

2 第二節では外来語の省略語基について簡単には触れるが、詳しくは林(2016)を参照されたい。

二、先行研究について

本研究は外来語の省略語の造語と関わる問題を扱うものであり、その関連する先行研究として主に森岡(1988)、小池(2005)、柴垣(2009)と林(2016)が挙げられる。

森岡(1988)は、形態素の崩される具合や文字または音声的な側面でみる略語の本質といった観点から日本語の略語の条件などについての論述である。略語は、文字ことば(ex.「彼は H よ」)や音声のぼかし(ex.「からオケ」)といった手段によって元の形態素が崩され暗に間接的に伝えられるという形態素の性格を有する、と述べられている。形態素を崩し、直接に明示せず、暗示的に表示するといった略語の特徴の考えは参考になると思われる。

小池(2005)では省略語と本来の完全語形の語との関係に注目し、両者の間に存在する、意味用法の違いや運用的意味の相違などが指摘された。大変示唆的であるが、論文中に短縮の語例は挙げられてはいるものの、その短縮の語基に関する本質的な論述はさほど見られない。

柴垣(2009)は外来語を含む複合語短縮形の語例を採集し、語構成、拍数、短縮パターンなどからその語構成的特徴を検討したものである。この論文では複合語短縮形の省略語基化の定着が省略語基の造語機能をもつことにつながっている、ということは確かめられたが、複合語短縮形による外来語の省略語基に関する詳細な語基の性格の記述は欠けていると思われる。

林(2016)は本格的に外来語の省略語基を取り上げた論述であり、音節数や結合相手、結合位置、造語力などの観点から外来語省略語基の造語性について論じた。また、分析を通して外来語省略語基の形態上また造語上において漢語に近似している語構成的特徴も明らかにした。いわゆる外来語の省略語基というのは、例えば「海外ロケ」「セルフレジ」における「ロケ」「レジ」などのような先に〈省略〉した後〈複合〉の機能を果す要素のことである。本稿で取り上げた「ラジコン」「スパコン」「ロリコン」などの「-コン」はそれら

臺灣大學學術期刊資料庫

と違って、複合する際に生じる省略形の要素だと考えられよう[3]。即ち、「-コン」は、形態素としての性質においては林(2016)で取り上げられた外来語の省略語基と異なることがあるように思われる。

三、考察法と分析対象

省略形の外来語形態素「コン」の造語例の調査に当たって、まず、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)及びネット辞書 goo から「コン」を含む複合略語を収集する。冒頭では「コン」を後項要素にもつ複合略語が多いと述べておいたが、実際に今回の二つの資料からも、収集できた 148 例の略語のうち、「コン」が複合略語の前項要素になる例は「コンパネ」「コンマス」「コンデジ」「コンマン」と僅か 4 例しかないのである。即ち、「コン」は大体において複合語の後項に位置する省略形の外来語態素だと言えよう。以下、この省略形の外来語態素「コン」について主にそれが後項要素の複合略語を分析の対象とする。

上記した二つの資料から、「-コン」が複合語の後項に位置する複合略語をピックアップした後、まず、後項要素としての「-コン」の元語基の意味を確認する。そして、それぞれの、元語基から略した「-コン」の造語力、結合相手、また略語の造語法や略し方などに関して考察を行うが、そういった分析を通して「-コン」という省略形の構成要素の造語性を分析したい。

上述した通り、本稿では複合語の後項要素としての「-コン」の造語性質などを明らかにする故、分析の対象は原則として「-コン」を後項に含む二次的結合の略語である。従い、「～コン」[4]複合略語が更に他の形態素と結び付く三次的以上の結合語、例えば「水冷エア

[3] 森岡(1988)10 頁に、外来語の略語には、単独で用いることのできるもの及び形態素が複合する際に生じる省略形と二種類あり、例えば「テレビ」「スト」「ロケ」などが前者で、「ゼネ」「コミ」「バタ」などが後者だと述べられている 。本稿のテーマである「-コン」は前者ではなく、後者に当たる要素だろうと思われる。前者の「テレビ」などの省略語基による造語は林(2016)を参照されたい。

[4] 本稿では「-コン」が省略形の外来語形態素をさし、「～コン」とは省略語基「-コン」を含む複合略語をさす。

華南師範大学外国語言文化学院

コン」「スーパーファミコン」など、また「セミコン」「テレコン」といった単純語からの略語は対象外とする。一方、場合により「ミニコン」「ネオコン」などのような接頭辞に「-コン」が付く、言わば、一種の擬似複合語の略語とでも言える例、また、前に触れておいた「コンパネ」「コンリハ」などのような「コン」が前項要素としての複合略語も分析に入れることがある。なお、「シスコン」(「システムコンポーネント」の略と「シスターコンプレックス」の略)といった、「-コン」を含む同音異義の複合略語の場合はそれぞれを別の語として考察するのを断っておく。

四、形態素「-コン」の分析

今回 BCCWJ とネット辞書 goo から、「-コン」を含む複合略語は異なり語数で 148 語収集できた。その複合略語を形成する外来語形態素「-コン」の元語基の意味を確認すると、異なり「-コン」の元語基は次の如く、

「アイコン」「コンクール」「コンクリート」「コンサート」
「コンサバディズム」「コンサルティング」「コンサルト」
「コンシャス」「コンストラクター」「コンストリクター」
「コンダクター」「コンタクトレンズ」「コンディショナー」
「コンディション」「コンテナ」「コンテスト」
「コンデンサー」「コンテンツ」「コンテンポラリー」
「コントラクター」「コントローラー」「コントロール」
「コンパ」「コンバーター」「コンバーターレンズ」
「コンバット」「コンビニ」「コンピューター」「コンプレックス」
「コンプレックス」(エンターテイメント複合施設)
「コンベンション」「コンポーネント」
「コンパクト」「コンフィデンス」

と、34 個[5]もあり、実に多くの意味を有する外来語形態素と言える。

[5] 山下(2006：103)に、『三省堂国語辞典 5 版』(2001)では「-コン」を異なる原語の意味として 12 に分けて記述している、と述べられている。今回の調査

臺灣大學學術期刊資料庫

以下、造語力、造語法、略し方、結合相手の諸観点から「-コン」の語構成的性質について論じる。

（一） 造語力から

まず、語基の造語力を検討すると、「-コン」の元語基の中で最も造語力をもつのは「コンサート」であり、その意を表す「～コン」複合略語は 49 例もヒットできた。中に「夏コン」「元旦コン」や「SMAP コン」「キンキコン」などの固有名詞の芸能人のコンサートを表す例が目立って多く、かなりの造語力を示している。ところが、この「コンサート」を表す「コン」は今回の調査では辞書 goo からは、前にも挙げた「コンマス」という、形態素「コン」が結合語の前項に位置する 1 例のみであるが、他の「嵐コン」「ユニットコン」「初コン」「ドームコン」などの 48 語はいずれも BCCWJ から集めた実例なのである。「コンサート」を意味する省略形の外来語形態素「-コン」の造語が日本人の言語生活にかなり浸透している現れであろう。

次に、造語力二位につけたのは「コンピューター」の意を表す「-コン」であるが、これは前述した造語力一位の「コンサート」と異なり、辞書 goo からは、「オフコン」「ストコン」「スパコン」「パソコン」「ファミコン」「ペタコン」「ポケコン」「マイコン」「マジコン」「ミニコン」「レセコン」と 11 語ピックアップしたのに対し、BCCWJ からは僅か「ホルコン」「サイコン」の 2 語だけである。

次に、造語力を三位に示したのは「コンパ」の意を表す「-コン」である。今回の調査では、「合コン」「追いコン」「オミコン」「殿コン」「姫コン」「街コン」「ヤングコン」「ベジコン」「翼コン」「空コン」[6]と 10 語収集でき、いずれも BCCWJ からヒットした例であるが、そのうち、「合コン」「追いコン」「街コン」の 3 語は goo にも収録されている。

を通して「-コン」の原語は辞書記述のより大分多いと明らかになった。

6 「翼コン」「空コン」などは「婚活」の種類であるが、「婚活」とは「街コン」と同じように合コンイベントなどの形を通して交流することなので、このような場合の「-コン」は「婚活」と「コンパ」という両方の意味をもつと考えられよう。

臺灣大學 日語學科資料庫

上述した、今回の調査で造語力前三位を占めた「-コン」の元語基「コンサート」「コンピューター」「コンパ」の造語実態からすると、それぞれの造語の分布は規範性のある辞書か実際に使用されたコーパスのどちらかに偏っている、と明らかになった。これは、「-コン」という同音異義性をもつ外来語形態素の造語を解明するには辞書の例のみならず、実例コーパスの使用例も併せて調査する必要があることを物語っている。

次に、4 語～10 語の造語例をもつ「-コン」の元語基は、

「コンプレックス」(ex.「ファザコン」「シスコン」…)、
「コンテスト」(ex.「イソコン」「バリコン」…)
「コンデンサー」(ex.「イソコン」「バリコン」…)
「コントロール」(ex.「ラジコン」「リモコン」…)
「コンクリート」(ex.「なまコン」「レミコン」…)

があり、これらは BCCWJ からも goo からもその造語例がヒットできる。

他に「コントローラー」をはじめ、「コンダクター」「コンサルタント」「コンバーター」などの 26 個(77%)の元語基は僅か 1～3 語だけの造語に留まっている。

上の造語実態からまとめると、省略形の外来語形態素「-コン」の造語は主に幾つかの元語基に集中しているが、他に約 8 割近くの元語基はそれほど造語力をもたない、と判明した。

（二） 造語法から

「-コン」を含む省略語の造語法は、大まかに複合語からの短縮法(ex.「パーソナルコンピューター」→「パソコン」)及び「-コン」と他の語基との結合（以下、[～＋コン]と略す）(ex.「夏」＋(「コンサート」の)「-コン」→「夏コン」)、と二つのパターンに分けられる。

「-コン」の元語基から「-コン」の造語法を検討すると、34 個の元語基のうち、複合語からの短縮法による「～コン」の多い語基は「コンピューター」をはじめ、「コンデンサー」「コンプレックス」

臺灣大學圖書館期刊資料庫

「コンクール」などの 29 個の元語基がある。一方、前に述べた、実例コーパスで旺盛な造語力を示す「コンサート」「コンパ」の場合は、短縮法よりも、[～＋コン]造語法による例(「ジャニコン」「J ロックコン」「単独コン」「嵐コン」「殿コン」「ヤングコン」「街コン」「ベジコン」…)が断然に多い。[7]

また、今回の調査の造語総数からすると、複合語からの短縮法による「-コン」を含む略語は 89 例(60%)ある[8]のに対し、[～＋コン]による造語例は 59(40%)あるとの結果である。即ち、全体の造語数からしても、「～コン」複合略語は造語法では[～＋コン]より複合語からの短縮法のほうがやや多く、全体の半分以上を占めている。

なお、調査資料別に見ると、辞書 goo に登録されているのは、「生コン」以外に他は複合語からの短縮法による「～コン」造語ばかりであるのに対し、BCCWJ では旺盛な造語力を示す「コンサート」「コンパ」という元語基による造語が多く、即ち、短縮法の造語よりも[～＋コン]造語法による略語のほうが多いのである。ここで規範性の高い辞書の登録語例と実例コーパスの使用例における略語の造語法が異なる様相が観察されたわけである。

上述した造語法の実態から省略形の外来語形態素「-コン」の語構成的性格を考えてみると、34 個の元語基のうち、「コンサート」と「コンパ」だけは[～＋コン]造語法が旺盛であり、即ちこの二つの元語基からの「-コン」は語基性が高いと考えられよう。言わば、「コンサート」と「コンパ」は語基性が高いからこそ、実例コーパスからは、その活発な造語性を見せ、自由に他の語基と結合する例が多

---

[7] 他に、複合語からの短縮法と[～＋コン]造語法が同じぐらいの勢力を示している元語基もあり、「コンタクトレンズ」からの「-コン」(「カラーコンタクトレンズ」→「カラコン」、「黒＋コンタクトレンズ」→「黒コン」)の一例だけ見られた。因みに、「黒コン」は「カラコン」からの類推造語だと思われよう。なお、「戦コン」(←「戦略＋コンサルト」)と「空コン」(←「空のコンテナ」)の「コンサルト」と「コンテナ」の意を表す「-コン」はともに[～＋コン]造語法による 1 例のみ見当たった。いずれも少数なので、省いておく。

[8] 短縮法による造語は、「レーコン」(RACON「ラトコン」(RATCON)「ラプコン」(RAPCON)のようなイニシャル短縮法でできた例も、また「ミニコン」(←「ミニコンピュータ」)「サブコン」(subcontractor)といった派生語からの短縮略語も含まれるが、ただこれらは少数派である。

数ヒットできたわけであろう。一方、他の、「コンプレックス」「コンクール」「コンテンツ」などの多数の元語基からの「-コン」は、他の語基と結合したわけではなく、短縮前の元複合語が存在するため、複合語からの短縮という造語法がはたらくのである。これらの「-コン」は、大抵生産性がそれほど高くもなく、つまり、語基性がそんなに高くないと見られよう。

ところが、造語力の二位につけた「コンピューター」の意を表す「-コン」は、造語力を示しているものの、一位の「コンサート」と三位の「コンパ」と違って、[～＋コン]造語法ではなく、複合語からの短縮法のほうがはたらくのである。それは、「コンピューター」の意を表す「-コン」を含む複合略語は、そのうち「パソコン」をはじめ、「サイコン」(←「サイクロコンピュータ」（cyclocomputer）)「ポケコン」(←「ポケットコンピュータ」(pocket computer))「マイコン」(←「マイクロコンピューター」(microcomputer))などの外国の音訳複合語からの短縮が少なくないことと関わっているからであろう。この音訳複合語からの短縮法は盛んであるためなのか、外国語の音訳語に留まらず、「ホルコン」(←「ホールコンピューター」)「オフコン」(←「オフィスコンピューター」)「レセコン」(←「レセプトコンピューター」)といった和製複合語から短縮した造語も見られるようになったと考えられよう。言わば、「コンピューター」の意を表す「-コン」は、[～＋コン]造語法ではないものの、複合語からの短縮の造語法をもって音訳複合語のみならず、更に和製複合語の略語も作り上げ、ある程度旺盛な造語機能を果たしている。というわけで、「コンピューター」の意を表す「-コン」も語基性が高い形態素と見られよう。

（三） 略し方から

「-コン」を含む複合略語について略し方から検討すると、大まかに〈前後略〉と〈後略〉と二種類にまとめることができる。

〈前後略〉というのは、複合語の前・後項要素がともに一部ずつ省略される場合をさすが、後項要素は大多数「-コン」となるので、

臺灣大學圖書館

その元語基の後部分が略されるわけである。一方の前項要素は、例えば「ロボットコンテスト」から短縮した「ロボコン」のように、前項要素も後部分が略されるパターンが一番多く、典型的である。他に、前項要素の中の一部分が略されるのもあり、例えば、「ホールコンピューター」からの「ホルコン」のような前項要素の中間の長音が略される例も、「アイソレーションコンデンサー」から略された「イソコン」のような前項要素の前・後部分が略されるのも、また「バイパスコンデンサー」から前項要素の前部分が略された「パスコン」のようなものも、色々と含まれる[9]。なお、この〈前後略〉の略し方は大体前述した、複合語からの短縮法の造語例のほうに見られる。

一方、〈後略〉という略し方とは、複合語の前項要素は略されずそのまま残るが、後項要素の「-コン」の元語基の後部分が略されるだけの場合をさす。主に[～＋コン]造語法で造り上げられた略語のほうに多く見られ、例えば、「街コン」(←「街」＋「コンパ」)「翼コン」(←「翼」＋「コンパ」)「初コン」(←「初」＋「コンサート」)「ユニットコン」(←「ユニット」＋「コンサート」)「ソロコン」(←「ソロ」＋「コンサート」)などが挙げられる。[10]

今回の調査で得た 148 例の複合略語「～コン」のうち、〈前後略〉の略し方による語は 85 例あるのに対し、〈後略〉による語は 59 例あった。[11]

以上、略語の造語法と略し方の調査からして、「～コン」複合略語においては、〈前後略〉の略し方そして複合語からの短縮法による例

---

[9] ここで述べた後項要素の後部分が略されるパターン以外に、「ファビコン」(←「favorite icon」)のような、後項要素は前部分(「アイ-」)が略された例を一つヒットした。

[10] 他に[～＋コン]造語法ではなく、短縮法による、例えば「ノー・コントロール」から後項要素の後部分だけが脱落して短縮した「ノーコン」のような後略の例もある。また、派生語から略された語も大体この後略法により造語された例であり、例えば「サブコン」(←「(subcontractor)」)などのようである。

[11] ここに書いた〈前後略〉と〈後略〉の略し方以外に、「レーコン」(RACON)「ラトコン」(RATCON)などのようなイニシャル短縮法も 3 例、また「コンフィデンスマン」から前項要素の後部分が略され、後項要素の「マン」がそのまま残った「コンマン」、言わば〈前略〉法による語も 1 例あった。

が、〈後略〉の略し方そして[～＋コン]造語法による例より多い、と明らかになった。

（四） 結合相手から

「-コン」と結合する相手について音節数と語種から検討してみる。

まず、音節数に関しては、今回の調査で「-コン」と結合する相手語基の音節数では 2 音節語がかなり優勢であり、107 例あって約 7 割強も占めている。他に 4 音節、3 音節語もあるが、それぞれ 20 例と 15 例でそれほど多くない[12]。なお、資料別に見ると、辞書 goo に登録されている例は「ワールドコン」以外は、「-コン」と結合するのは全て 2 音節語ばかりである。BCCWJ の場合も「-コン」の結合相手の音節数は 2 音節が一番多いが、他に 3、4、5、6 音節語も見られ、ややバラエティがある。

次に、語種の観点から「-コン」と結合する相手を調べ、その結果は次の表一で示す。

表 一 「-コン」との結合相手の語種

語種	外来語	漢語	和語	アルファベット	混種語	その他
数	92	23	16	12	2	3

表一[13]からわかるように、「-コン」と結合する相手の語種においては外来語が一番多く、約 60%を占めている。特に辞書 goo に登録されている例では「-コン」の結合相手は外来語が完全優勢であり、65 例のうち、50 例(約 77%)もある。なお、「-コン」の結合相手には固有名詞が 33 例(約 1/5 強)もあり、それは殆ど元語基「コンサート」との結合した造語によるのであり、例えば、「えびきすコン」「SMAP コン」「V6 コン」などが挙げられる。

ここでは、上で造語法、略し方、結合相手の観点で論じた「-コン」の語構成的特徴に基づき、「～コン」略語の典型的な造語パターンは

[12] 他に結合相手が 5 音節の語(ex.「バースデーコン」など)も 6 音節の語(ex.「7 Days＋コン」)もあるが、今回の調査ではそれぞれ 4 例、2 例しかヒットできず、稀である。やはり語形の長い外来語略語は定着しにくいのであろう。

[13] 表一の中の「その他」というのはイニシャル短縮例(「レーコン」(RACON)など)のことである。

臺灣大學期刊資料庫

次の通りにまとめられよう。

(前後略の短縮法による)[2 音節の外来語要素＋コン]

例として「ボディコン」「ケミコン」「レセコン」「エスコン」などが挙げられる。この造語特徴は辞書 goo の例には特に顕著に見られた。言わば、辞書 goo に登録されている「～コン」複合略語は造語パターンが決まっているのが多い。

なお、一般的には和語の略語は全体として少ないと言う[14]ものの、上述した複合略語「～コン」の典型的な造語パターンからの類推なのか、「終わコン」(←「終わったコンテンツ」)、「オミコン」(←「お見合いコンパ」)のような、(意味からしては)あまり自然ではない和語形態素の崩し方による前項要素と「-コン」が結合した珍しい略語例も生じたのであろう。

五、「-コン」の本質について

斎藤(2013)では、「ワー(ド)プロ(セッサ-)」や「写メ(ール)」の中の「ワー」や「メ」などのような、殆ど造語力のない要素の位置づけに関しては、宮島(1972＝1994:121)の「無意味形態素」という概念が参考になると述べられているので、本節では、「-コン」の本質を考えるに当たり、まず、いわゆる「無意味形態素」と対照し、語構成的特徴から両者の共通点と相違点を分析し論じてみる。また、「社」「学」といった漢語形態素及び、先に〈省略〉してから〈複合〉した「スト」「レジ」などの外来語省略語基との比較も触れ、省略形の外来語形態素「-コン」の本質を突き詰めて明らかにしたい。

宮島(1972＝1994)で言う無意味形態素というのは「ビー玉」や「昆虫」などにおける「ビー」、「昆」などのようなものであるが、これらの要素は自立の形態では単語にもなれないし、他の合成語を造る要素として現れることもなく、つまり、「それ自身では積極的な意味をもっておらず、つねにほかの特定の(有意味的な)要素と結びついて

[14] 森岡(1988)12 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

あらわれる」[15]のである。

では、「-コン」と「ビー」や「昆」といった無意味形態素における共通点と相違点について考えてみよう。

まず、「ビー」や「昆」などの無意味形態素が語の中に存在しうる根拠は、現実と直接むすびついているのが単語であって語の構成要素ではないということにある、と宮島(1972=1994)で述べられている[16]が、この点においては「-コン」も同じである。但し、「ビー」や「昆」などの無意味形態素は最初からそのままあるのではなく、省略されることによって初めて形態素として存在するようになるわけであるのに対し、「-コン」はそれとは反対に、短縮前の元語基である外来語・外国語の完全語形がそもそも存在しているのであり、省略されることによってそういった存在になるものではない。以上のように、要素存在の根拠という点においては「-コン」と「ビー」、「昆」などの無意味形態素における共通点と相違点が見受けられた。

次に、形態、意味、結合位置、造語力、と四つの語構成的特徴から「-コン」の本質にアプローチしよう。

1) 形態的には、

「-コン」は「ビー」、「昆」などの無意味形態素と同じく、本質的に拘束形式である。上に述べたが、「ビー」や「昆」などの無意味形態素は常に他の要素と結びついて現れるものであり、「-コン」も普通単独では語として現れることができないのである。

2) 意味的には、

「-コン」は意味不明ではないが、ただ、それ自身だけでは積極的な意味をもっているのではない。「～コン」複合略語は短縮前の(意味を有する)形態素がほかの要素と結合した複合語に復元可能である。即ち、「-コン」は、(共時的に)短縮前の完全複合語の語形に復元すると、意味の明確な元語基になる。言わば、「-コン」は意味のある元語基からの省略であり、他の要素と結合する際に生じた短縮

[15] 宮島(1972=1994)121 頁、斎藤(2013)31 頁を参照。
[16] 宮島(1972=1994)122 頁、斎藤(2013)99 頁を参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

形で意味付けが働くわけである。この点においては、「-コン」は無意味形態素と相違する。なお、ここで述べている通り、「-コン」は、ちょっとしたニュアンスを付け加えたりするに過ぎないわけではなく、ちゃんとした語彙的意味をもつ故、接辞ではなく、語基と見なされるべきであろう。

3) 結合位置から、

宮島(1972=1994)では、無意味形態素は名詞の構成要素にいちばん多く見られるが、その複合名詞の後項要素が上位概念を表し、無意味形態素は前項要素になってその上位概念の後項要素を限定、修飾するのが特に多い、と論じられている[17]。一方、「-コン」は無意味形態素と違って、今回の調査では複合語の後項要素になるのが断然に多く、複合語の上位概念を表すのが大多数である。両者にはこのような結合位置の相違が見られたのは、その語基の有する意味の明確性とでも関わっているように思われる。即ち、元語基のはっきりした語彙的意味をもつ「-コン」形態素は複合語の上位概念を表す後項要素に位置することができるのに対し、明確な意味をもたぬ無意味形態素はなりにくいのであろう。

4) 造語力から、

無意味形態素はある特定の語とだけ結び付く、いわゆる「唯一形態素」である場合が多いと言う[18]が、「-コン」は第四節の(一)で考察した如く、その造語力は主に幾つかの元語基にのみ集中しており、特に元語基が「コンサート」「コンピューター」「コンパ」の場合は高い造語力を見せている。一方、他の多数の元語基はせいぜい 3 語以下の造語に留まっており、それほど生産性がない。要するに、様々な意味をもつ「-コン」はその元語基によって造語力の高いものも低いものもあり、多様性を示している。この造語力の点においても「-コン」と無意味形態素との相違点も見られた。

ここで上述した内容に基づき、「-コン」の形態素としての位置づ

[17] 宮島(1972=1994)129 頁。
[18] 斎藤(2013)30～31 頁を参照。

臺南大學學術期刊資料庫

けをまとめなおそう。

「-コン」は拘束形式であり、その意味は短縮前の複合語への依存度が高いものの、ちゃんとした意味をもつわけなので、「短縮形拘束語基」と言えよう。これは、「社」「学」「機」といった漢語形態素と類似していると思われる。森岡(1988)では、「社」「学」「機」などの漢字は元の漢語(「会社」、「大学」、「機械」など)を代表していると見られ、それらの漢語熟語が定着し普及すると、その漢語の要素である「社」「学」「機」が元の漢語を代表して極めて高い造語力を発揮するようになり、例えば、「(会)社」から「社長」「社宅」、「学(校)」から「学長」「学内」、「機(械)」から「飛行機」「発動機」などと派生する、と論述されている[19]。森岡(1988)ではこれは漢語形態素の独特の機能だと言っているが、本稿で論じた「-コン」という短縮形の外来語形態素も、短縮前の様々な元語基の外来語が定着し普及するので、その外来語語基が短縮形をもって造語の役割を果たすようになり、様々な短縮形の外来語を造り上げているわけである。要するに、短縮形拘束語基「-コン」も、元の語基が語として定着して普及する故、造語力をもつようになるという点で、語構成的な本質においては「社-」「学-」「-機」といった漢語形態素と似ていると考えられよう[20]。

なお、短縮形拘束語基「-コン」を「ロケ」「レジ」などの造語力をもつ外来語の省略語基と対照して分析してみよう。

まず、前にも説明しておいたが、「ロケ」「レジ」などのいわゆる外来語省略語基というのは先に〈省略〉してから〈複合〉した要素であり、自立用法ももち、単独でも語としてはたらくことができる。即ち、この自立・拘束という形態素形式の観点では拘束形式の「-コン」は「ロケ」「レジ」などの外来語省略語基と違う。

次に、結合位置と結合相手という二つの語構成的特徴から、「-コ

[19] 森岡(1988)6 頁。

[20] ただ、森岡(1988)では「社-」「学-」「-機」などの漢語形態素が他の語基と結合した派生語は略語と意識しないと述べられているが、省略語基によって造り上げられた語は略語かどうかといった認定の問題は本稿では論外にしておく。

臺灣大學學術期刊資料庫

ン」と「ロケ」「レジ」といった造語力をもつ外来語の省略語基を比較してみよう。林(2016)では「ロケ」などの外来語省略語基は合成語の前項要素になるという結合位置の特徴、また外来語よりも表意性のすぐれた漢語と結合しやすいという二つの造語特徴がある、と述べたが、一方、「-コン」は前述した如く、殆ど複合語の後項要素になり、外来語要素との結合が約 6 割を占めている。この調査結果から見ると、結合位置と結合相手の語構成的特徴においては「-コン」は「ロケ」「レジ」などの造語力をもつ外来語の省略語基と随分相違すると見受けられた。

更に、語基性の高い「-コン」と低い「-コン」を分けて考えてみる。前節では種々の意味をもつ「-コン」のうち、造語力の上位三位、元語基「コンサート」「コンパ」「コンピューター」からの「-コン」は語基性が高いものと見られるのに対し、他の意を表す多くの「-コン」はせいぜい 3 語以下の造語に留まっているので、語基性が低いものと見られる、と前節で述べた。

まず、元語基「コンサート」「コンパ」から略した語基性の高い「-コン」を見よう。この二つは積極的に他の要素と結合し、 [〜＋コン]造語法で高い造語力を発揮し、多くの略語を造り上げている。このことからして、「ロケ」「レジ」といった外来語省略語基と近似していると見られよう。実は、元語基「コンサート」から略した「-コン」は、現に「テレビ」などと同じく、下の自立用法の例も見られるようになった。これは外来語省略語基に近似している証とでも考えられよう。

> …この楽しみが半減してました。今回、ワーって思ったのがやっぱり自分がコンで初めて聞く曲でした。“とまどいながら”“Still...”そして“イチオクノホシ”ぜんぶバラードだね。あ、“Re(mark)able”とか“truth”とかは初めて聞くのは… (Yahoo!ブログ 2008)

ただ、この独立用法の「コン」は語彙的な省略ではなく、(前後の文

臺灣大學學術期刊資料庫

脈による)臨時的な省略だと思われよう。[21]

一方、元語基「コンサート」「コンパ」以外の、「コンクール」をはじめ、「コンテンツ」「コンテナ」などの大多数の語基性が低い「-コン」は、造語力が低く、造語法も短縮法に限定され、即ち、造語性においては「ロケ」「レジ」といった造語力をもつ外来語省略語基と異なる。

ところが、語基性の高い「-コン」にはもう一つ、元語基「コンピューター」からのがあるが、その造語法は「スパコン」(←「スーパーコンピューター」)などのように複合語からの短縮なのであり、[～＋コン]造語法が旺盛である元語基「コンサート」「コンパ」の「-コン」と違う。即ち、この「コンピューター」から略した「-コン」は、語基性が高いものの、造語法が「ロケ」「レジ」といった造語力をもつ外来語省略語基と異なり、言わば、前述した元語基「コンサート」「コンパ」からの語基性の高い「-コン」とその他の語基性の低い「-コン」の中間的な要素とでも考えられよう。

要するに、様々な意味をもつ「-コン」に関して、その形態素としての本質は、元語基が「コンサート」「コンパ」の語基性の高い場合は「ロケ」「レジ」などの外来語省略語基に近似していると見られるが、一方、他の大多数の語基性が低い場合は「ロケ」「レジ」などの外来語省略語基と異なる短縮形拘束語基なのであり、そして、中間的なものとして「コンピューター」という元語基からの「-コン」がある、とやや複雑に見受けられた。

六、おわりに

常に複合語の後項に位置する、生産性をもつ外来語形態素「-コン」は、複数の元語基から崩され、ぼかされた同音異義の略語形である。本稿では、まずその「-コン」の意味について、「コンサート」をはじめ、「コンピューター」「コンパ」などの 34 個の元語基を確認できた。次に、造語力、造語法、略し方、結合相手の諸観点から「-コン」

[21] 語彙的な省略と臨時的な省略は中川(2015)35 頁を参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

の語構成的性格を分析し、更にその語構成的特徴に基づき、(前後略の短縮法による)[2 音節の外来語要素＋コン]という「～コン」複合略語の典型的な造語パターンも解明した。

そして、「-コン」の本質について、宮島(1972=1994)の無意味形態素と比較しながら、「-コン」と無意味形態素との類似点や相違点の分析を通して、「-コン」は短縮形拘束語基という形態素としての位置付けを論じた。最後に、「-コン」の本質をより浮き彫りにさせるために、「-コン」と「社」「機」「校」といった漢語形態素との類似点も、また「ロケ」「レジ」などの外来語省略語基との近似及び相違の造語性も論述した。

省略形の外来語形態素「-コン」は、多くの元語基から形態素が崩された同音異義語の性質をもつ故、語基性の度合いの違いによって、「ロケ」「レジ」といった造語力をもつ外来語省略語基に近似している語基性が高いのも、それほど造語力をもたず、語基性が低いのも、更にその中間的なものもある、と多様かつ複雑な語構成的本質を有する、やや特殊の短縮形拘束語基だと本稿の考察を通して明らかにできた。

参考文献

國廣哲彌(1982)「第 3 章　多義と同音異義」『意味論の方法』(大修館書店)

小池清治(2005)「〈手タレ〉〈脚タレ〉とは何のことか？」『シリーズ〈日本語探求法〉4　語彙探求法』(朝倉書店)

斎藤倫明(2013)「第 2 話　語種と語形成」『レキシコンフォーラム No.6』(ひつじ書房)

柴垣知香(2009)「外来語を含む複合語短縮形の通時的変化」『思言東京外国語大学記述言語学論集』第 5 号

中川秀太(2015)「漢語・外来語の略語」『日本語学』第 34 巻第 2 号 (明治書院)

臺灣大學圖書館期刊資料庫

宮島達夫(1994)「第 3 章 無意味形態素」『語彙論研究』(むぎ書房)
森岡健二(1988)「略語の条件」『日本語学』第 7 巻第 10 号 (明治書院)
山下喜代(2006)「現代日本語の語構成要素 ―外来語を中心にして―」『紀要』48 (青山学院大学文学部)
林 慧君(2016)「外来語省略語基の語構成的特徴」『日本語日本文學』第四十五輯(輔仁大學外語學院日本語文學系)

臺灣大學學術期刊資料庫